理論と実践の経営財務入門③

総合的財務力を計る経営診断

III

財務コンサルタントとしての着眼点を身に付け
財務目利き力を養成する

企画・販売　日本ビジネスドック株式会社
製作・編集　一般社団法人全国経営診断士協会

目次

1．財務分析の手順と実践…… 5
（1） 資産と負債・純資産の全体のバランスをみる…… 5
（2） 短期の支払い能力をみる…… 7
（3） 剰余金で会社の過去の業績の蓄積をみる…… 8
（4） 資産の内容をみる…… 9
（5） 借入金の内容をみる……11
（6） 大きな数字、大きな変化をみる……13
（7） 時系列で収益状況をみる……17
（8） キャッシュ・フロー計算書で資金繰りをみる……19
（9） 注記及び附属明細表をみる……22
(10) 財務指標の同業他社との比較 ≪ケーススタディ≫……23
短期の安全性の分析……23
長期の安全性の分析……24
成長性の分析……24
収益性の分析……25
効率性の分析……26
損益分岐点分析……26
一人当たり分析……27
一株当たり分析……27
(11) まとめ……28
【コラム】上場企業の決算と適時開示 ……29
2．決算と決算処理……31
（1） 決算とは……31
（2） 決算で何をするのか……31
（3） 勘定科目ごとの決算整理……31
現金・預金……32
受取手形・売掛金……32
棚卸資産（商品）……34

収益と費用の「繰り延べ」……38
収益と費用の「見越し」……39
固定資産……40
投資その他の資産……42
繰延資産……43
支払手形・買掛金……43
借入金などその他負債……43
純資産の部……43
（4） 決算期について……45
日本の企業において、3月決算が多いといわれる理由……46
その他の決算期のメリット……46
3．中小企業の決算書を読みとく……47
（1） 利害関係人と決算書……47
（2） 流動資産のチェック項目……48
（3） 固定資産のチェック項目……50
（4） その他の資産のチェック項目……53
（5） 負債・保証のチェック項目……53
【コラム】経営者保証に関するガイドライン ……55
（6） 税金・社会保険料のチェック項目……56
【コラム】法人税申告書　別表とは ……58
（7） 中小企業の実際の分析　≪ケーススタディ≫……59
【コラム】中小企業会計 ……73
4．粉飾決算・逆粉飾決算とは……75
（1） 粉飾決算とは……75
（2） 粉飾決算の動機と要因……76
（3） 粉飾決算の代表的なパターン……78
（4） 粉飾決算を見抜くことが出来るか……81
（5） 逆粉飾決算とは……81
【コラム】中小企業経営者を守るための制度と生命保険 ……84
①小規模企業共済……84

②経営セーフティ共済（中小企業倒産防止共済）……86
③生命保険……88
5．連結財務諸表……92
（1） 連結会計とは……92
子会社の範囲と連結の範囲……93
持分法の範囲……95
（2） 連結財務諸表……99
連結決算日…… 100
（3） 連結決算処理…… 101
連結決算の複雑化…… 101
連結決算のプロセス…… 102
附　録（セーラー財務諸表）…… 106

序　　章

第３分冊「総合的財務力を計る経営診断」では、財務コンサルティングの中でも最も重要な財務諸表の裏側を読み解く目利き力を学んでいきます。

儲かっていない企業の経営者は、一般的に自らの会社の財務諸表を良く見せようとするものです。

一方、儲かっている企業の経営者は、税金を払いたくないので、財務諸表の数字を悪く見せようとします。

本通信講座は、財務の入門コースですが、財務諸表に載っている数字の意味を深く把握する力を身につけていただくことを目的にしています。

ケーススタディとして、第２分冊で登場した、株式会社パイロットコーポレーション（以下、「パイロット」）の同業他社であるセーラー万年筆株式会社（以下、「セーラー」）を取り上げました。

同じ文具メーカーである両社の財務内容は大きく異なります。どこに違いがあるのかを知ることにより、企業をより深く分析できる力が身につきます。

次に、決算とは何をすることなのかを学び、上場企業とは異なる中小企業の決算書について、飲食業を営む会社の分析を行っていきます。

また、最近、東芝などで注目を集めている粉飾決算について、そのカラクリを学んでいただきます。粉飾の動機と手法を知ることは、財務の理解を深めることにつながります。

最後に、上場企業のみならず、企業グループを形成している非上場企業も多く、連結決算に関してもおおまかな理解が必要です。

３冊のテキストと３回の添削問題を通して、企業の財務力を実践的・総合的に把握できる力を養っていただくことを願っております。

また、CFM財務管理診断士を取得し、財務コンサルタントとしてのご活躍を期待しております。

１．財務分析の手順と実践

財務分析を効果的に行うためには、問題点をしっかりと把握するための手順を知る必要があります。平成25年及び26年12月期のセーラーの財務データをもとに、財務分析の手順を説明します。

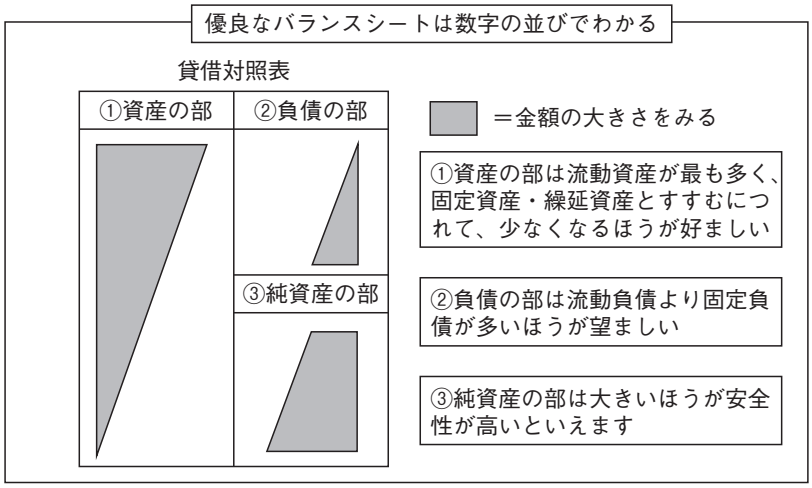
（１） 資産と負債・純資産の全体のバランスをみる

財務内容の良い会社は、一般的に流動資産が厚く短期支払い能力が優れており、一方で負債が少なく、純資産の部が厚いといった特徴があります。

貸借対照表（勘定式）を見ると、両側に勘定科目と数字が並んでいますが、数字の並びを見ると、それが「良い会社」の条件を満たしているか大まかに知ることができます。

資産サイドは流動性が高い資産の多いほうが決済能力も優れ、安全性が高く、負債・資本サイドは、逆に資本金や固定負債が多いほうが好ましいといえます。

また、金額の大きさをみるだけでも、ある程度のバランスを把握することができます。



ケーススタディ

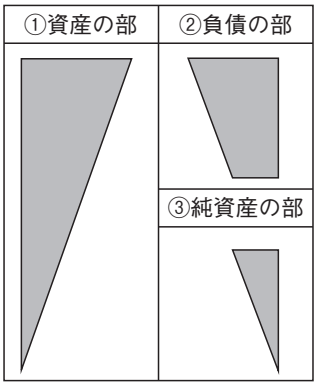
セーラ貸借対照表で全体のバランスを見てみましょう。

平成25年12月期セーラー連結貸借対照表抜粋

（単位：千円）

流動資産	3,117,540	流動負債	3,093,663
固定資産	1,647,924	固定負債	1,085,093
繰延資産	0	純資産の部	586,707
資産合計	4,765,464	負債純資産合計	4,765,464

資産サイドは、流動資産が大きく、繰延資産がゼロなので、問題なさそうです。負債・純資産サイドは、上が大きく、下になるほど小さな数字になっていますので、バランスが悪く、財務的に良い会社とはいえないことがわかります。



（2） 短期の支払い能力をみる

短期の支払い能力を把握することは、その企業の安全性をみる上で非常に重要なポイントです。すぐにでも、資金繰りに窮してしまう可能性があるのか、当面は大丈夫なのかという観点で把握します。

その為の、チェックポイントは、「流動資産」の額は「流動負債」の額の何倍あるかということです。理想値は2倍ですが、そこまでの企業はそうそうあるものではないので、「流動資産」＞「流動負債」となっているかを確認します。

さらに、短期の支払い能力を測る指標として当座比率があります。当座比率は、流動資産から棚卸資産（商品在庫）などの比較的換金性の低い資産を差し引いた「当座資産」が、流動負債の何倍あるのかを確認する指標です。

ケーススタディ

セーラーの貸借対照表の資産の部より、短期の支払い能力を見てみましょう。

平成25年12月期セーラー連結貸借対照表抜粋

（単位：千円）

資産の部	
流動資産	
現金及び預金	719,451
受取手形及び売掛金	1,227,751
商品及び製品	593,367
仕掛品	124,197
原材料及び貯蔵品	404,395
その他	70,805
貸倒引当金	△22,428
流動資産合計	3,117,540

流動比率の計算をしてみましょう。

前ページの貸借対照表より、流動負債の金額は、3,093,663千円でした。

・流動比率＝流動資産÷流動負債×100

＝3,177,540÷3,093,663×100

＝102.7％

かろうじて、「流動資産」＞「流動負債」となっていますが、かなり厳しい状

況です。

次に、当座比率を計算します。

・当座資産＝現金及び預金＋受取手形及び売掛金－貸倒引当金

＝719,451＋1,227,751－22,428

＝1,924,779

・当座比率＝当座資産÷流動負債×100

＝1,924,779÷3,093,663×100

＝62.2％

セーラーの平成25年12月における短期の支払い能力には、かなり注意が必要であることがわかります。

（3） 剰余金で会社の過去の業績の蓄積をみる

会社の過去の業績を端的に表している勘定科目が利益剰余金です。

利益剰余金のうち「その他利益剰余金」には、「積立金」（任意積立金や別途積立金という科目で表示されます）と「繰越利益剰余金」がありますが、これらは、企業の内部留保の金額を表しています。したがって、「その他利益剰余金」がどのくらい蓄積されているかで、企業が今までどのような状況にあったかを知ることができます。

たとえ、今期儲かっていても、利益剰余金の蓄積の薄い企業であれば、かつてはそれほど儲けていなかったか、長く赤字が続いた時期があったかなどの要因が考えられます。

資本金の額は小さくても利益剰余金の額が、資本金の額をはるかに上回っている企業もあります。そのような会社は、過去に、しっかりと税金を払ったうえで、利益を内部留保として蓄えた証拠です。

ケーススタディ

セーラーの貸借対照表の純資産の部の株主資本より、利益剰余金の額を見てみましょう。

平成25年12月期セーラー連結貸借対照表抜粋

（単位：千円）

株主資本	
資本金	2,523,192
資本剰余金	891,887
利益剰余金	△3,558,460
自己株式	△20,101
株主資本合計	△163,482

利益剰余金が、約マイナス36億円に達し、株主資本合計もマイナスとなっています。（純資産の部がマイナスである状態を「債務超過」といいます）この場合、今期に大きな損失を計上したのか、過去の赤字決算の蓄積であったのかを確認する必要があります。セーラーの平成25年12月期の連結損益計算書から、当期純損失は約3.6億円（16ページを参照）なので、平成25年だけの損失ではなく、過去の赤字の蓄積であることがわかります。

（4） 資産の内容をみる

資産の部に並んでいる勘定科目は、その企業が負債や資本金で調達した資金をどのように運用しているかを表しています。ここに好ましくない勘定科目がないか、あるいはそれが増加していないかということをチェックします。

例えば、投資有価証券や短期貸付金などの残高が増加していたり、新たに追加されていたり、という場合には、その内容について確認する必要があります。

ケーススタディ

セーラーの貸借対照表の資産の部の各勘定科目を見てみましょう。

平成26年12月期セーラー連結貸借対照表抜粋

（単位：千円）

	前連結会計年度（平成25年12月31日）	当連結会計年度（平成26年12月31日）
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	719,451	1,667,453
受取手形及び売掛金	1,227,751	1,221,855
商品及び製品	593,367	620,899
仕掛品	124,197	133,492
原材料及び貯蔵品	404,395	459,553
その他	70,805	115,937
貸倒引当金	△22,428	△10,250
流動資産合計	3,117,540	4,208,942
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物（純額）	76,339	75,340
機械装置及び運搬具（純額）	35,712	28,725
土地	953,233	953,233
リース資産（純額）	3,176	7,018
建設仮勘定	1,067	11,325
その他（純額）	14,729	56,049
有形固定資産合計	1,084,257	1,131,693
無形固定資産	10,842	13,971
投資その他の資産		
投資有価証券	432,967	254,548
その他	224,617	214,279
貸倒引当金	△104,760	△76,134
投資その他の資産合計	552,824	392,693
固定資産合計	1,647,924	1,538,359
資産合計	4,765,464	5,747,301

好ましくない勘定科目は、とくに見当たりませんが、有形固定資産に占める「土地」の金額の大きさが目を引きます。建物は、減価償却されて金額が小さくなっていく一方で、土地は、時価で再評価されている理由によるものと推測されます。

平成25年と26年の比較で見ると、現金及び預金が７億円から17億円に倍増しており、その増加の原因を把握する必要があります。投資有価証券が２億円減少しているほかに、目立った変化はありません。